
永遠の幸せ

匿名希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の幸せ

【Nコード】

N9268L

【作者名】

匿名希望

【あらすじ】

「あなたが好き」の続編。夫婦になった新一と志保の物語です。

「三」での新一君の誕生日が五月五日になってしまっています。私の手違いで、間違っていました。正しくは五月四日です。

ご指摘頂いた方、ありがとうございました。

「新一、朝よ」

毎朝決まった時間に、彼を起こすのが私の日課。布団で、まるで子供の様な寝顔の彼を、優しく揺すりながら声をかける。

「新一。早く起きないと、遅刻するわよ？」

「……………うん」

なかなか出てこない。

昨日は帰って来るのが遅かったから、大分疲れてるんだと思う。私も、本当ならゆっくり寝かせてあげたいけど……

彼も仕事だから

邪魔する訳にはいかない。

「新一、早く起きなさい」

「……………うん。ああ、起きるよ」

ようやくお目覚め。

「新一。朝ご飯出来てるから、早く降りてきてよ?」

まだ寝ぼけ眼の彼にそう伝え、私は一足先に下に降りた。

彼との結婚生活が始まって1ヶ月。大分、この家での生活にも慣れてきた。最初は、驚く程広い部屋に圧倒されて、掃除をするのも一苦労。ちんたらやってたら、何時の間にか日が暮れてしまう。今は、手際良く出来る様になって来たけど。

外で「工藤さん」と呼ばれるのにも大分慣れた。

そして、彼を「新一」って呼ぶのも

随分、自然に言える様になった

前は、恥ずかしくてなかなか呼べなかったけど……

「今日も遅くなる？」

彼を見送る時。正直言うと、この時間が一番嫌い。

だって、彼と一緒に居られなくなるから

「今日は、七時過ぎには帰って来られると思うからさ」

「じゃあ、夕飯は一緒に食べられるわね」

「ああ。じゃあ、行ってきます」

そう言って、出掛けようとする彼。その彼の腕を私は掴んだ

「志保？」

「……………何か、忘れてない？／／／／」

私がそう言うと、新一はフツと笑い、私にキスをしてくれる。

「行ってきます。愛してるよ志保」

「行ってらっしゃい。私も、愛してるわ」

彼が見えなくなるまで見送る私

「…………さてと、掃除しようかしら」

今日も、何時も通りの朝でした

二（前書き）

短いです

二

夕飯の仕度が済んだ頃、新一がちょうど帰って来た。玄関先から「ただいま」って声がする。

「おかえりなさい」

「ただいま」

軽く抱き寄せられ、額にキス。

「／／／もう」

本当に幸せな新婚生活。毎日毎日が幸せで、幸せすぎておかしくなりそうだわ。

「今日はカレーか？」

「ええ。すぐ用意するわね」

夕飯を食べ終わると、彼はソファに座って読者。私は洗い物をする。

洗い物を終えたら、次はお風呂の用意。

「新一、お湯入ったわよ」

「ああ、わかった」

着替えを持って、風呂場に消えた彼。

ちょっと、寂しい

新婚なんだから

一緒に入る？とか、言ってくれてもいいのに

私からは、恥ずかしくて言えない

だから、新一が言ってくれないと……………

(…………私、何時からこんな事考えるようになったのかしら)

自分で考えてて恥ずかしくなった。

そうこうしてたら、新一がお風呂から上がってきた。

「そろそろ寝るか」

布団に入った私達。布団同士はくっついてるけど……

やっぱり、布団だけがくっついてるんじゃ、物足りない

彼の布団にゆっくり入っていった。

「志保？どうした？」

「…………一緒に、寝ちゃ駄目？」

甘えた声を出す。

顔が真っ赤になってるのも、自分でわかる

「なんだ、寂しかったのか」

でも、ちゃんと彼は私を抱きしめてくれるから

新一の温もりを感じながら

私は目を閉じた

三

五月五日。今日は私の最愛の人がこの世に生を受けた日。

夫婦になって、初めての彼の誕生日。

プレゼントにはネクタイを買ってある。夕飯は家で食べるから、私も何時もより腕をかけて作った。

(…………早く、帰って来ないかしら)

彼の帰りを心待ちにする私の耳に、彼の「ただいま」という声が聞こえた。

「豪華だなあ。今日は」

毎度の事だけど、彼は自分の誕生日を必ずと言っていい程忘れる。もしかして、わかってやってるのかしら。

「今日は誕生日でしょ？あなたの」

「……………そういえば」

まあ、彼の様子から本当に忘れてるのはわかるんだけど。

夕飯を食べ終わった後、彼にプレゼントを渡す。一週間前に買ったネクタイ。ちょうど、ネクタイの種類が少ないって言ってたからプレゼントに選んだ。

「はい。プレゼント」

「おお。ありがとう志保」

「……………ネクタイなんだけど、どう？」

封を開けて、自分に合わせてみる新一。

やっぱり似合うわね。

「どうだ？」

「ええ。素敵よ」

サンキュー。とお礼を言いながら彼は私にキスをする。

ああ。本当に幸せね私

ずっとずっと。この幸せが続きますように

「じゃあ、行ってくる」

「ええ。気をつけてね」

何時もの様にお見送り。「行ってらっしゃい」のキスも忘れずに。

「あつ、そうだ志保」

出掛けようとして、彼が言った。

何か忘れ物かなと思っていたと

彼は私の耳元で呟いた。

「昨夜の志保、すっげえ可愛かったぜ？」

そう言われて、昨夜の事が私の頭に蘇る。

彼を見送る私の顔は

きつと、真っ赤になっていたに違いない

四（前書き）

感想、お待ちしております

四

名前を呼ばれるのが、こんなに待ち遠しいのは今日が初めての待合室で、ドキドキしながら順番を待つ私。

「体調悪いなら、一回病院で見てもらえよ」

彼は鈍感だから、まさか私が産婦人科に来てるなんて夢にも思っていないでしょうね。

彼の誕生日から二ヶ月が過ぎて、私は体調不良を訴えていた。最初はまさかとは思ってたけど、毎月必ず来てたアレが来なくなっただと確信に近い気持ちを持って、今私は産婦人科に居る。

(…………私、母親になるかもしれないのね)

以前だったら、全く考えられなかった。

私が、母親になるなんて

ちゃんと育てられるかしら

まだ妊娠したとわかった訳でもないのに、色々考える。

よっぽど、浮かれてるのね、私。

「間違いないですね。妊娠しています」

担当の女医さんからそう言われた時、本当に嬉しかった。

私のお腹の中に

私と新一の子供が居る

こんなに幸せな気持ちになれたのは

やっぱり、彼が居たからね

「ただいま」

事件の捜査から帰って来た彼に、妊娠の事を何時告げようか、悩んでる。

夕飯の時？

夕飯の後？

布団に入ってから？

出来れば早く言いたいけど、結構緊張するわね

何て言おうかしら

きっと彼、今までにないぐらい驚くでしょうね

楽しみだわ

夕飯も食べ終わって、寛いでいる時。チャンスは新一が作ってくれた。

「あつ、そうだ。志保、病院行ったのか？」

「……………ええ。行っただわよ」

「どうだった？」

少し間をあけて

「……………ちょっと、普通の人とは違うところがあったの」

「えっ！？なつ、何だよそれ、大丈夫なのか？」

「今は大丈夫だけど、後何ヶ月もしたら、お腹が大きくなってきて、吐き気がしたりするわ」

多分、その言葉で彼も理解したらしい。

「……………本当か？」

私は無言で頷いた。

「……………やべえ。俺、嬉しくて泣きそうだ」

我が家に、新しい命が生まれるまで、後八ヶ月。

五

私の妊娠が発覚して三ヶ月。少しずつだけど、お腹が大きくなってきた。定期検診では、お腹の子は元気に育っているみたい。

新一は、毎日お腹の子に話しかけてる。

親バカになる可能性、大ね。

「じゃあ、行ってくる」

「ええ。気をつけてね」

何時もの様に、行つてらっしゃいのキス。

でも、子供が生まれたらあんまりそういう事出来なくなるわね。

今の内に、しとかないと

そんな事を考えてると、顔が熱くなる。

「こんにちは」

お昼を過ぎた頃、私の友人、河西桜が訪ねて来た。

彼女は、阿笠博士の知り合いの娘で、学会に行った時に知り合って、以来友人になった。新一とも、何度かあった事はある。

年齢は、私と同年。

「どう？調子は」

「ええ、悪くないわ。経過も順調みたいだし」

「良かったね」と自分の事のように喜ぶ桜。彼女は以前からこういう性格だ。

まあ、そういうところが好きで、私も友達で居られるんだけど

「ねえ志保、名前とかはもう決めてるの？」

「それはまだよ。男の子か女の子かわからないし」

「でも、名前ぐらいは決めれるじゃん。あつ、女の子だったらさ、桜にしない？」

「……クスッ。考えとくわ」

「ただいま」

「お帰り」

帰ってくるなり、お腹に触れて、お腹の中の子に呼びかける。これが最近の新一の日課。

「ただいま。パパだぞ」

返事は当然の如くないけど、新一の耳には「おかえり」っていう声が聞こえてるみたい。

「ああ。早く生まれて来ねえかな」

「あと、五ヶ月よ」

お腹の子が産声があげるまで

後、五ヶ月

六（前書き）

久しぶりに投稿です。お待たせしました

六

それは、本当に突然だった。

お腹もかなり大きくなり、予定日まで後五日をきったある日、友人の河西桜が家を訪ねて来てた。

心配性の彼だから、私を一人にはしたくなかったみたいで、朝早くから桜を呼び出して、私が無理をしないか見張らせてる。

「ねえ、これはどこにおけばいい？」

「あつ、それは、あつちのダンスに入れといて。……ごめんね、桜」

「いいよいいよ。あんた妊婦なんだから、こついう事は任せなさいって」

テキパキと家の用事を済ませてくれる桜。

本当に、感謝しなきゃね

昼過ぎ、私と桜でくつろいでいた時、それは突然やって来た。

「……………うっ！」

激しい痛み

間違いなく、陣痛だった

「志保？大丈夫！？」

しかも、今までとは比べものにならない痛み。

本当に、死んでしまうんじゃないかって思う程の痛みが、体を襲う。

「すみません！妊婦が、産気づいたんです、大至急来て下さい！！」

桜が救急車をすぐに手配してくれた。

それから

新一にも連絡を入れてくれたみたい

病院に行く途中の、救急車の中でも、桜は私の手をずっと握ってくれた。

「大丈夫よ、志保」

ただひたすら、そう繰り返し、私を安心させようとしてくれた。

私も、桜の手を強く握り締めていた。

四月七日。 晴れ

午後五時二十七分。

米花総合病院

分娩室にて

一つの、新たな命が誕生した。

「志保、よく頑張ったな」

「お疲れ様。志保」

ベッドに横たわる私に、そう声をかける新一と桜。私の隣には、先程産声をあげたばかりの子が、寝息をたてている。

赤ちゃんは女の子。

体重は2760グラム。

少し軽めだけど、健康状態には何の心配も無いみたい。

新一と私の赤ちゃん

これから、大事に育てていこう

私は、固く心に誓った。

「ねえ新一。赤ちゃんの名前、考えててくれた？」

名前は新一が考える事になった。男の子か女の子か、まだわからないうちに決めてたらしい。

新一は鞆から、色紙の様なものを取り出して、私に見せた。

「春に生まれるんなら、こついつのがいいんじゃないかと思ってさ」

色紙には漢字が一文字書かれていて、横にはちゃんとふりがなもふつてある。

「……………どうかな？」

「……………クスッ。ええ、素敵な名前ね」

工藤家に新たな家族が、増えた。

「宜しくね？桜ちゃん」

七（前書き）

完結です。ありがとうございました

七

「可愛いな」

ベビーベッドで小さな寝息をたてている愛娘「桜」。その様子を、新一はもう三十分以上見続けている。

やっぱり、親ばかになったわね

「さくら、パパだぞ」

帰宅してまずそう話しかけるのが決まり。

「ちょっと、さっき寝かしつけたばかりなんだから、起こさないですよ？」

「ああ、ごめんごめん」

だけど、新一の気持ちがわからない訳じゃない。

初めての子供

やっぱり、他の家の子よりずっと可愛いと思うし

私も、親ばかね

子育ては本当に大変

赤ちゃんは言葉を出せないから、全てを泣く事で知らせようとする。

お腹がすいた時、眠いとき、とにかく何でも泣いてしまうから、本当に大変。

夜中に泣き出す事もしばしばある。

でも、そんな時

新一が、助けてくれる

「志保、ちょっと休んでろよ。桜は俺が見てるから」

仕事で夜遅くに帰って来て、物凄く疲れてる筈なのに

やっぱり、夫婦っていうのはこういうものなのね

互いに手を取り合って、生きていく

だから、幸せだって思えるんだと思う。

新一

ありがとう

あなたのお陰で、本当に助かってる

あなたのお陰で、本当に幸せよ

これから、宜しくね？

あなたとずっと生きていきたいから

永遠の幸せ

私とあなたと、そして桜で

築いていきたいから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9268/>

永遠の幸せ

2010年10月11日17時38分発行